慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | トーマス・マンの『非政治的人間の考察』について：「正義と真理に反して」の章を中心に |
| Sub Title | Über Thomas Manns "Betrachtungen eines Unpolitischen" |
| Author | 坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 2011 |
| Jtitle | 法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.12 (2011. 12) ,p.939(34)- 960(13) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 斎藤和夫教授退職記念号 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20111228-0939 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法学研究 84 巻 12 号（2011：12）

# トーマス・マンの『非政治的人間の考察』について

## ――「正義と真理に反して」の章を中心に――

坂　口　尚　史

はじめに
1　第一次世界大戦中のトーマス・マン
2　兄ハインリヒとの対立
3　ロマン・ロランとの確執
おわりに

## はじめに

Thomas Mann Chronik の 1933 年の項目をみると、ワーグナー歿後 50 年にあたっていたこの年、57 歳のトーマス・マン（1875-1955）は、2 月 11 日午後 4 時にミュンヘンを出発してオランダのアムステルダムへ向かい、12 日そこで上演された楽劇「パルジファル」を見た[1)]。翌 13 日、アムステルダムのワーグナー協会の招きにより、「リヒャルト・ワーグナーの苦悩と偉大」と題する講演を行った。講演旅行はブリュッセル、パリと続けられるが、ドイツではアドルフ・ヒトラーが政権を獲得しており、危険を感じたマンはドイツへ帰ることはなかった。ここから亡命が始まった。

トーマス・マンといえば、亡命した反ナチの代表的な作家であり、アメリカ国籍も取り、民主主義陣営にあって、「ドイツの聴取者の皆さん」[2)] と題したラジオ放送によってヒトラーのドイツを攻撃したことでも知られる。政治的（politisch）な活動がこの作家を有名にしたといってもよい。しかし、同じ作家が第一次世界大戦が始まるころまでは、非政治的（unpolitisch）な、反民主主義的（antidemokratisch）な作家であった。ところが突然、時勢にのって、

戦争を支持するエッセイを発表し、平和主義者であったフランスの作家ロマン・ロラン（1866-1944）から攻撃されたのであり、ドイツ国内の数少ない平和主義者であった兄ハインリヒ・マン（1871-1950）からは、フランスの作家ゾラを論じたエッセイのなかで、「むこうみずに先走りする連中」[3] の一人にされてしまった。

それに対して、600 頁を超える論争の書『非政治的人間の考察』（Betrachtungen eines Unpolitischen）が執筆され、1918 年の秋に出版されたのである。この膨大な評論集をまとめて論じるには、まだ準備不足であるので、本稿は、序文から数えて 7 番目の章である「正義と真理に反して」にしぼり、兄ハインリヒとロマン・ロランへの反論について扱うことにしたい[4]。

## 1　第一次世界大戦中のトーマス・マン

第一次世界大戦中、ロマン・ロランは、パリのオランドルフ社から、『戦いを超えて』と題した評論集を刊行した[5]。1914 年に大戦が勃発したとき、ロランはスイスに滞在していたのであるが、トルストイの思想の影響を受けたために反戦論者であり、祖国を愛していた彼は、激しい愛国主義（Patriotismus）のうずまくフランスへ帰る気にはなれなかった。この評論集の序文のなかでロランは次のように述べている。

> 「戦争におそわれた偉大な民族は、単にその国境を防御しなければならないばかりではない。その理性を守らねばならない。災禍のために狂いたける錯覚、不正、愚劣から、理性を救わなければならない。おのおのその務めがあり、軍隊は祖国の国土を守り、思想家は祖国の理性を守るのである。」[6]

『戦いを超えて』は、1914 年 8 月 29 日付で書かれた、ドイツのゲルハルト・ハウプトマン宛の公開状に始まり、翌年 8 月 2 日付で『ジュネーブ新聞』に載ったジョレスを悼む文章まで、16 編の論説や公開状から成っている。その中には、ランス大聖堂がドイツ軍によって砲撃された直後に書かれ、戦争をやめさせるために何ひとつしないドイツの知識人たちに対するはげしい譴責

を述べた第 2 章「プロ・アリス」や、トーマス・マンが 1914 年に発表したエッセイ「戦時の随想」（Gedanken im Kriege）を攻撃している第 8 章「偶像」（Le idols）が含まれていた[7)]。

ドイツにも、反戦論者、平和主義者はいたのであるが、全体から見るとごくわずかであり、少数派であった。トーマスの兄ハインリヒやヴェルナー・ヘルツォークらがその中にいた。他の圧倒的多数の、著名な詩人、学者、芸術家たちは、戦争を支持していた。ロランの立場から見て、ドイツの知識人にも反戦を呼びかけるべきだと思われたので、ハウプトマン宛の公開状において、ドイツがベルギーの中立を侵犯し、ルーヴァンを砲撃で破壊したことに関して政府に抗議してほしいと要請したのであったが、ハウプトマンはこれに対応せず、逆にドイツの知識人 93 名の連署でもって拒否の返事をしたのであった。

トーマス・マンの「戦時の随想」は、ロランの眼から見て、とくに非理性的であるように思われた。マンは、この戦争が「文明」に対して、ドイツがその独自の「文化」を護ろうとする戦いであることを強調していた。「文明」が理性であり、啓蒙主義であり、緩和と道徳[8)]を目標としているのに対し、「文化」は精神による世界の形成であって、血生臭い野蛮をも排除しない、デモーニッシュなものの昇華であるとしていた。そして、軍国主義と文化は兄弟であるという極端な主張が見られた。この点がロランから、異常であると攻撃された。

それまで、政治的な関心をもつことがほとんどなく、芸術家のあり方を追求してきたマンが、80 年の生涯のほぼ真ん中にきて、突然このような文章を公にした理由は何だったのであろうか。のちにマンは、この文章を過失とみなし、自作の評論集にも収録しなかった[9)]。マンは当時の大勢に順応したのだったが、しかし、マン自身にもそうする動機があり、行動をおこさせたいくつかの理由があったことが、ヘルマン・クルツケによって指摘されている。

クルツケによってあげられた理由は、次の 6 点である。1. 戦争がデカダンスと審美主義の方向感覚喪失からマンを解放し、生きることに意味を見出した。2. 戦争がマンの創作の危機を救った。3. 戦争がこれまでおさえてきた、兄ハインリヒに対する憎しみをつのらせた。4. 戦争が、偉大な作家と

なって、国民に尊敬されるという野心をおこさせた。5. 戦争が、自分を男らしく見せることを許した。6. 戦争が、精神と生に対立を解消し、総合に向かわせるように思った[10)]。

これらの理由の中でも、3番目の理由が重要である。ここにきて、兄弟の対立が表面化して、1922年に和解が成立するまで時間がかかった。いわゆるBruderkriegの期間に入ったのである。先にあげたChronikによると、『非政治的人間の考察』は、最初の200頁に及ぶ部分が、1915年10月から16年1月にかけて書かれたとされている。残りが、16年4月から18年3月にかけて書かれた。小説『魔の山』の執筆は中断されていた。執筆のきっかけは、兄ハインリヒが1915年に発表した「ゾラ」論であった[11)]。しかし、執筆を促進したのはそれだけではなかった。トーマスにとって、前半生をまとめる大きな理論的な、theoretischな著作が心のなかにあった。1909年、34歳のころノートの形で書かれたGeist und Kunstのテーマがそのままになっていた。完成した著作は、敵に対する過激な表現を含んではいるが、自らを育ててくれた19世紀の偉大なドイツの文化的伝統を詳細に語って、スケールの大きい評論の主作品（Hauptwerk）となっている。単なる論争書だけに終わらせない、たいへん魅力的な自己点検の書でもある。全体として見た場合、政治家（Politiker）に対立する「審美主義者」（Ästhet）の立場をつらぬいており、哲学、倫理、宗教のテーマもとりいれた、文学者のあり方の追求である。この本を『審美主義者の考察』（Betrachtungen eines Ästheten）といいかえてもよいとしている、注釈者の言葉も納得できる[12)]。

ところで、この「審美主義者」という言葉は、『考察』のなかでは、「文明の文学者」とよばれている（実名でハインリヒとは書かれていない）、ハインリヒ・マンが、弟トーマスのことをさして言った言葉である。「審美主義者」がなぜ「正義と真理に反して」いるのか。括弧つきのこの題は、ハインリヒのエッセイ「ゾラ」の言葉である。「正義と真理」という表現は、ハインリヒの評論には頻出する。フランスの作家を尊敬し、自らの教養の基盤としているハインリヒは、ゾラの生涯を描き、「青春」、「労働」、「大地の詩」、「精神」、「行為」の５つの章に分けて述べている。ゾラが生涯の重大な局面において、正義と真理の側に立ったことを、「行為」の章は強調している。

その文中に「だが今や、優雅なそぶりで真理と正義に対立することはなんの意味ももたない。」[13] という一文が出てくる。トーマスは、ここを読んで、暗に自分のことをさしていることを理解した。ゾラが 1894 年のドレフュス事件に際してとった真理と正義に則した行動を、つまりドイツにあっては民主主義をドイツに実現させようとする運動につくそうとする行動を起こしていないことを非難されているとトーマスは感じた。兄弟を知るヘルマン・ケステンは、弟トーマスが兄よりも精神構造が複雑で、傷つきやすく野心的であると、表現を変えれば、感情を害しやすく名誉心が強いと言っている[14]。それほど兄の「ゾラ」論は弟を刺激した。クルツケは、たまりにたまっていた兄に対する不満が爆発したと見ている。この章には、「ゾラ」論の表現を意識してそれに反論を加えている個所がはっきりと見られる。たとえば、次のような表現がある。「私は長い期間、もっぱらフランス的なやり方で攻撃してくる、無視できない精神の持ち主を、兄弟の身近なところに持ちながら暮してきたのだ。」[15] とある。この兄（とはっきり書かれてはいないが）は、第一次大戦勃発とともにドイツを批判する側にまわり、ドイツ帝国を廃止してデモクラシーをドイツに導入し、ドイツ共和国樹立をめざした。弟トーマスの見方によれば、兄ハインリヒは、ゾラが批判した第二帝政時代のフランス（1852-1870）を最近 40 年間のドイツにおきかえて批判しているのだと感じられた。このようなことになった唯一の理由は、精神を高揚させる西ヨーロッパ流の「人間性」を持ったデモクラシーがないためであると決めつけられていた。

保守的なトーマスによれば、ドイツは偉大な文化の伝統を持った国であって、ドイツ帝国のなかでその伝統が生き続ける。自由と平等をかかげる民主主義の導入によりドイツが平板化されるのをおそれた。しかしそうはいっても、ドイツに忠誠を誓う、愛国心を持った芸術家になろうとしたのではない。「正義と真理に反して」の章は、まず政治と「愛国主義」（Patriotismus）に対する立場表明から始まる。政治に対する著者の立場は、「まことにドイツ的」であって、「政治とは国家への関与」であり、「国家に寄せる熱心さと情熱」であって、私の関心事ではない。国家とは精神的であるよりはむしろ技術的なものであり、一個の機械であって、人間の職分が国家的＝社会的なもののな

かへ消え去るとは思っていない。宗教、芸術、詩、科学は国家をこえて存在するものだと思っている。政治は非人間的であり、芸術家の関心は「人間的なもの」（das Menschliche）である[16]。

このように考える非政治的人間が、ではなぜ戦争を支持する立場を表明したか。マンは、大戦中に出たマックス・シェーラーの論文「偉大な国民の国民的イデーについて」を読み、影響を受けた[17]。そして、人間性の大規模なあらわれが戦争によってもたらされたと感じ、芸術家として感動したという。個々の民族の個性がにわかに強烈に浮き上がってきたように思った。「国民のグロテスクな人格化」がおこった。「各民族の原的意志（der Urwille）や明瞭な性格（intelligibler Charakter）が盤石のごとくに出現した」[18]という。独和辞典をみると、Urwille はショーペンハウアーの用語であり、intelligibler は哲学用語で、「知性によってのみ認識可能な」を意味している。カントの用語のようである。注釈者は、この語を民族全体にあてはめるのは、カントの意図に反しており、用語が不正確であることを指摘した。

このように著者の用語の不正確さは、これまで気がつかなかったことであり、新しい注釈付全集の成果であると思われる。大事なのはこのあたりの感じ方が、兄ハインリヒとはまったく違っている点である。さらにこのあと、あのヒトラーが愛読した著者であるポール・ド・ラガルドの著作が引用されているのにも驚かされる。

デモクラシ―を認めた 1922 年以後のマンからみれば、次の表現なども信じ難く思われる。ドイツが 1914 年 8 月 4 日に、ベルギーに侵入することによって犯したとされる、かの「不正」に関する帝国宰相（Theobald von Bethmann Hollweg）の演説が、「少しも政治的とは思われず、美しいと思った。」とされているのである[19]。トーマスは作家として自己を国民的に意識し、最も奥深いものをたくさん思い出したようである。民族を神話的な個人とみる、素朴的民衆的な見方に芸術家が共感をおぼえたからである。

「芸術家にしても、素朴的なものが全然無縁な要素となり、素朴的なものへ『帰る』ことがまったくできなくなってしまったとすれば、その芸術家はうまくいかないだろう、と私は考える。……彼が民族（Volk）であり、そして民族的に観察し感じることをすっかり忘れてしまわないでいる限り芸術家であり

詩人であるのだろう。」[20] 同じ時期に書かれたヘルマン・ヘッセの作品にも土着的民族的なものがあらわれていた。ヘッセは、非政治的な文章を書かなかったけれども。この流れに沿って、ポール・ド・ラガルドの著書の一節が引用される。トーマスが読んだのは、«Deutscher Glaube, Deutsches Vaterland Deutsche Bildung»というタイトルの本で、1913 年にイェーナの書店から出版された。マンが読んだ本が現存しており、書き込みがあると注釈にある。フリードリヒ・ダープがラガルドの著作から文を選んでまとめた読本である [21]。ラガルドは、普通選挙反対の論陣をはり、「民族を構成する一人一人の個人が語るとき、民族は全然語らない。民族総体が個々人の中で発現するときのみ、民族は語るのだ。」と述べている。さらに、ラガルドの意図をくんで、マンが次のようにまとめた。「国家は彼の関心事ではない。だが、祖国はたしかに彼にとっても関心事である。そして、戦争が彼に与えた体験はこうだ、――いままで国家と政治が彼の視野から遮っていた祖国を、彼がおそらくはじめて目にしたこと。彼の口でもまた発言した民族総体と、歴史上の偉大な事実との関係に、彼が感動をもって気づいたことなのだ。」[22] 当初否定された、愛国主義とトーマスの感じ方が接近してきたのではないのかと思わせる。トーマスだけではなく、多数派がこのように感じた。少数派はますます片隅においやられたのである。

## 2　兄ハインリヒとの対立

ドイツの多くの知識人をひきつけた民族的なものへの関心を指摘したトーマス・マンではあったが、自身としては民族主義に傾斜したわけではなかった。ポール・ド・ラガルドや、ゴビノーなどをとりいれて 15 年後にナチスの民族主義理論ができあがっていったように。そうではなく、「デカダンスの記録者で解説者、病的なものと死との愛好者、奈落への傾向をもった唯美主義者」である自分が、どうしたら役に立てるのかを考えた。そのとき、自分のなかにいるヨーロッパ的な文学者のことを思い出したのだという。自分のなかに「ラテン的なエスプリという持参金が、心からのドイツびいきと合体していることを思い出して、攻撃をかけてくる『文明の文士』に対抗するに

はかれら自身の武器で対抗しなければならないと思った。」この発言はたいへん重要である。トーマスの中にも、「文明の文士」になる要素があったのだ。彼にも母方のラテン民族の血が入っていた[23)]。兄は、弟が「目立とうと」していると考えたが、弟はそれを否定して、こう予想した。兄である相手方の「文明の文士」が怒ったのは、「戦時の随想」の愛国主義的な傾向だったというよりは、弟がとった「西欧文学的な形式」(westlich-literarische Form) だったのかもしれないと[24)]。

その証拠として、1915 年の春に、オーストリアのロマン・ロラン研究家、パウル・アーマンという人が、トーマスの「戦時の随想」について次のように書いてきたことを報告している。「文明に対する論争であるのに、文明の側が唱えている内容を予想させるようなフォルムで書かれている。……その文章をよく読むように、お願いしてもいいでしょうか。この文章の中ですべての強調語の由来を考えてみてください。思想も言葉もフランス的です……」と。

パウル・アーマンは、この章の内容に重要な役割をはたしているので、ロマン・ロランに対する反論のところでもういちど登場してもらうことにする。その前にトーマスは、自分のような人間がどうして熱狂的な愛国者になりうるだろうかと自問し、それを証明するために、19 世紀前半に現れた天才的な劇作家ハインリヒ・フォン・クライストを呼び出す。クライストが、ナポレオンに対してドイツ諸国が立ち上がった時に、「軽率なジャーナリストとして」執筆した論文「この戦争では何が問題なのか」を検討している。たいへん興味深いテーマであるが、本稿ではこの部分について論じるのを割愛し、別の機会に譲りたいと思う。ただ、クライストを紹介した言葉に注意しておきたい。クライストは、「このヒステリックなユンカー、――論理家、プロパガンディスト、非精神の先走り、人間のなかの人間以下の弱みへの復帰をめざしての先走り、時局に乗っていっしょに突っ走り、興奮して理性を失った男」という表現で紹介される。実はこの表現は、「ゾラ」論の中でハインリヒがトーマスの「戦時の随想」を批判して述べた表現をもじったものなのである。もちろんトーマスの名ではなく、ゾラをとりまく環境を述べた文のなかで言われているのであるが、ゾラは多数派に囲まれたハインリヒと読み替え

てさしつかえないのであるから。「ゾラ」にはこう出ている。

> 「……最上のすぐれた人々の抵抗がなくはなかったが、祖国は人間以下の状態への、複雑にからみあっておこった逆転に身をゆだねようとしている。それは、今日彼に準備された状態である。この逆転の音頭を取り弁護している人々、その論理家、プロパガンディスト、むこうみずに先走りしている人々は、できることならあとから責任をとってもらいたい。一つのことが今からはっきりしている。彼らにとっては容易だ。彼らの心情は追放と沈黙にたえることを要求しない。それとは逆に、われわれ他の者が沈黙し追放状態にあることから利益を得ようとしている。……」[25)]

このあたりを読んだトーマスには、衝撃が走ったことであろう。だから、同じ表現を使ってもじったのである。「正義と真理に反して」の章にはこのようなところが数多くある。先に述べたようにタイトルからしてそうなのである。問題のエッセイ「戦時の随想」をどうすべきか、トーマスは書簡で友人に知らせている。1915 年 1 月、マンはバイエルン州のバート・テルツにいたが、フィリップ・ヴィトコープ宛の書簡には、このエッセイを、「フリードリヒと大同盟」といっしょに本にすべきかどうか、フィッシャー書店が決めかねていて、ユリウス・バーブが反対していることを告げている。『フォールム』誌で、ヴィルヘルム・ヘルツォークという「生意気な若者」が攻撃してきている。「それはフランス化された急進的、民主主義的な人文的傾向で、わたしは戦争勃発以来それと戦っている」と告げている[26)]。しかし、『フリードリヒと大同盟』（Friedrich und die große Koalition）は 1915 年に Sammlung von Schriften zur Zeitgeschichte の一冊としてベルリンの S. フィッシャー書店から刊行された。筆者はドイツ滞在中に古書店でこの本の 1916 年版をみつけて購入したのであるが、冒頭に「戦時の随想」があり、次にメインの「大同盟」、最後に「ストックホルムの『スヴェンスカ・ダグブラット』誌編集局へ」を収録している。破損した表紙を眺めながら、トーマス・マンが生涯に初めて出した、政治的な行動の本がこれであることを思い、感銘を受けるのである。

「フリードリヒと大同盟」には「時局のためのスケッチ」という副題がそえ

られている。18 世紀のプロイセン国王フリードリヒ二世は、プロイセンをヨーロッパの強国に押し上げた業績を誇るが、列強と相対した状況が 20 世紀の第一次大戦勃発当時のドイツ帝国がおかれた状況ときわめて似通っていることを、85 頁にわたって述べている。周知のように、大王は後のアドルフ・ヒトラーの尊敬の対象であった。当時のトーマス・マンはヒトラーといろいろな点で共通していたのである。兄ハインリヒは、「邪悪な」フリードリヒ大王を嫌っており、亡命中の 1938 年に、宗教戦争の時代に寛容の精神を示した、尊敬するフランスのブルボン王朝の祖アンリ 4 世についての大きな作品を完成させている。「スヴェンスカ・ダグブラット」は、『考察』では「スウェーデン日刊新聞」と記されており、「これはわが生涯の最初の、そしておそらく将来にわたっても唯一のささやかな政治的行動であった」と述べているが、事実は「唯一の」ではなく政治的行動の始まりであったと言いかえてよいであろう。『考察』全体の性格について佐藤晃一は、「弟は兄の攻撃を防ぐことが、同時に自分自身の一部を攻撃することになるという苦境に立つ。それというのも、文明の文士は弟自身のなかにもいたからだ。論者自身の胸の中にある問題、論者自身の血の中を流れている対立であった」[27] と述べているが、正鵠を射ている表現である。それゆえにこそ、執拗な理論闘争が 2 年にもわたって続いたのである。

## 3　ロマン・ロランとの確執

ロマン・ロランに対する反論も、執拗なものであった。「正義と真理に反して」の章には、二人の一流作家が、「戦時の随想」に激しい攻撃を浴びせてきた、と述べている部分があり、章全体の中心的な部分である。一人は生粋のフランス人ロマン・ロランであり、公然と批判してきた。もう一人は、公然とではなく、暗示的に（anspielungsweise）批判してきたドイツ人なのだが、「精神化によって、ドイツ人同朋を超えてしまってフランス人になった男」だと言っている。明らかに兄ハインリヒ・マンのことなのだが、なんともってまわった言い方だろうか。なんとなく悲劇的な気配を感じさせる。ロマン・ロランに対する反論がここから具体的に始まり、25 頁以上も続くのである。

作家であり平和主義者であったロマン・ロランは、1916 年にノーベル賞を受けていた。『ベートーヴェン』（1903）や『トルストイ』（1911）の伝記があり、1904 年から 1912 年にかけて、大作『ジャン・クリストフ』を完成させており、トーマス・マンも友人の紹介によってこの小説を読み、評価していた。マンはロランを個人的には知らなかったが、注釈によると、1905 年に結婚した妻カーチャの両親の交友サークルに入っていたことがわかる。カーチャの父アルフレート・プリングスハイムは、ミュンヘン大学の数学の教授であり、ユダヤ系であった。ロランはある時期、数学者ミシェル・ブレアルの娘クロチルデと結婚していたが、その時期に妻の父はプリングスハイムとよく会っていたという。注釈には Kollege と書かれているので、同僚であったと思われる。しかしその後 1901 年、ロランはその妻と離婚していた[28)]。

マンの反論の前に、マンへの批判を含むロランの著書『戦いを超えて』がフランスの友人たちをも怒らせたという、その理由は何だったのかを調べておきたい。第一次世界大戦の前からスイスにいたロランは、大戦が始まって、ベルギーのルーヴァンの図書館や、フランス中世の貴重な遺産であるランス大聖堂がドイツ軍に砲撃された後、第 2 章の「プロ・アリス」を書いている[29)]。そして、独仏両国民に排他的な愛国心を捨てるように説いている。また、戦争に抗議しないドイツの知識人を攻撃している。ところが、本国のフランス人にとっても、スイスから愛国心を批判されたことには腹が立った。篠沢秀夫は、「（題名が）考えられるかぎり不器用である」との意見である[30)]。佐々木斐夫は、「ロランの政治思想」において、「フランスという民族国家の集団意識に帰属しきらない態度が、多くのフランスの知識人を刺激し、ことに熱狂的なショヴィニストを憤らせたのであった。彼らはたえずロランの作品と行動とに違和感を覚えていたようである。」と述べている[31)]。

当時は、フランスでもそれほど愛国心が強烈であったのである。篠沢秀夫と同じく、トーマス・マンもこの標題が自己欺瞞であると述べている。『戦いを超えて』は独訳すると、Über den Schlachten または Über dem Getümmel となる。Au dessus というのは思い上がりで、「超えている」などということはありえない、「中立」というのは大戦中では不可能であるとしている。ロランは決して中立とはいえない。その証拠に、「アルベール王の書」（Das King

Alberts Book）にロランが、たいへん感動的な論文「正義のために苦しむ国民へ」を捧げているではないかというのがマンの主張である。この文は、1914年11月2日万霊節の日付をもって『戦いを超えて』の6番目に収められている。侵入してきたドイツ軍に勇敢に反抗し、敗れたベルギー国王アルベール一世を賞賛する各国の知識人の文を集めた本であり、1914年にロンドンで刊行された。この本にロランは、短いが興味深い寄稿をした。ベルギー出身の作家メーテルリンクと詩人ヴェルハーレンをたたえ、フランドルの快男児ティル・オイレンシュピーゲルの名をあげている。この第1章はマンの眼から見てとても中立にはみえなかった[32)]。

第2章「プロ・アリス」には、1914年9月の日付があるが、本文の「世界にとって威嚇的な誇大妄想狂、事実を見ようとしない93人のインテリたち」の箇所に注があり、「これを書いたときには、トーマス・マンが1914年11月に『ノイエ・ルントシャウ』に発表した奇怪な論文を知らなかった。」と記されている。この注をマンは、フランス語の原文で引用しているが[33)]、「トーマス・マンの奇怪な論文」（宮本正清訳）は、»article monstrueux de Thomas Mann……« と書かれている。フランス語の monstrueux は、マンにとってショッキングな、ひどい表現であった。「醜悪な、極悪な」という意味もあり[34)]、例をあげて紹介された他の厳しすぎるフランス語とともに、温和な聖職者のようにみえるフランス作家の言葉とはとても思えないと非難している。

第8章「偶像」のところに、ロランのマンに対する攻撃の主要部分が見られる。大事な一節を引用してみよう。

> 「マンは、傲慢と激しい狂信の錯乱発作のなかで、かつてドイツに対して加えられた最悪の非難をもって、ドイツを飾ろうと躍起になっている。オストヴァルトは文化の問題と文明のそれとを同一視しようとしているのに、マンは、『両者の間にはなんの共通点もない。今行われている戦争は、文明に対する文化（すなわちドイツ）のそれである』と宣言し、傲慢の駄法螺を狂気にまで推し進めて、文明を理性 Vernunft, Aufklärung, 温和を Sänftigung, Sittigung, 精神を Auflösung, Geist ――そして文化を『世界の精神的組織』――『血腥い野蛮を排除しない』――と定義しているのである。文化は悪魔的なものの嵩高化（die Sublimierung des Dämonischen）である。それは『道徳、理性、科学を超越し

た』ものである。

オストヴァルトやヘッケルは軍国主義のなかに、文化が勝利のために用いる一つの道具、一つの武器しか認めないのに対して、トーマス・マンは、文化と軍国主義は兄弟であり、また一方の理想と他方の理想は唯一のもの、同一のものであり、それは同一の原理をもち、彼らの敵は同一であり、その敵というのは平和であり、この敵は精神であると断言するのである。……」（宮本正清訳）[35]

このあとに、マンが引用した、シラーのドラマ「メッシーナの花嫁」の一部がそのまま紹介されている。「法律というものは弱者の友であって、／あらゆるものをただ平等にし、世の中を平板なものにしたがる／だが戦争は力を顕揚し……」という 3 行である[36]。ウィルヘルム・オストヴァルト（1853-1922）はドイツの化学者、哲学者、エルンスト・ヘッケル（1834-1919）はドイツの生物学者、評論家である。ロランは、フランスでは自由思想家も労働者も、すべてが昨日までの信念を棄て去って「祖国」という「偶像」に心を向けたことを嘆いている。

トーマス・マンの反論は、まず「戦時の随想」に関して、マンは文化が暴力（la force）にほかならないと宣言したとロランが要約したことに向けられている。エッセイ全体が、「暴力の犯罪的な高い値の指し値」であるとされている点である。ドイツ語では、ein verbrecherisches Übergebot an Gewalttätigkeit と訳されているが、Übergebot は商業用語で、競売で他人よりも高い指し値を出すことを意味する。フランス語でロランが用いた表現は、Surenchere criminelle de violence であり、マンはこのフランス語もそのまま引用している[37]。surenchere は、「せりあげ（相手以上の高値をつけること）」を意味する。ロランの表現は、マンにとってはあまりにも強すぎるように思われた。本当にマンはそのようなことを言ったのであろうか。

「戦時の随想」をよく読んでみると、ロランが上記のような解釈に到達した原因は、やはり「文化」の定義にあるように思われる。たしかに、マンは、「文化」と「文明」を対立するものとしてとらえている。「文化」は、はっきり言って、野蛮の反対ではない。文化はむしろ様式をそなえた野生である。文化は、閉鎖性、様式、形式、姿勢、趣味であり、世界のなんらかの精神的な組

織であり、すべてが非常に冒険的であり、奇矯で野性的であり、血生臭く、恐ろしいものだ、とマンは主張している。これに対して「文明」は、理性、啓発、緩和、道徳、懐疑、解消、つまり精神である。その精神は市民的であり、衝動の敵であり、情熱の敵であり、反デモーニッシュ、反英雄的であるとされる。そして、「文明」を敵にまわして、ドイツは「文化」を護るために戦っているとしている[38)]。

このあたりから、マンの態度が傲慢であるとか、思い上がっているという印象をロランが持ったのであろう。戦争中の発言であるので、普通のときよりも過激に受け取られたのではないかと、マンも想像している。ロランが指摘した「大ぼら」(forfanterie) という言葉もそうであるが、これは「戦時の随想」のなかで、芸術と戦争を結び付けたくだりから来ている。そこにはこう書かれている。

> 「芸術は革命的にふるまうことがあっても、それは荒々しい始原的な方法であって、進歩の意味においてではない。芸術は保持し、形を与える力なのであって、解消する力ではない。人々は芸術を宗教とか民族愛に近いと説明することによって芸術を尊重してきた。人々は芸術を別の根源的・根本的な力のそばに置いてもよろしい。まさにわれわれの地球やわれわれ全員の心を揺るがすような。わたしは戦争のことを言っているのだ。」[39)]

この部分を読む限り、マンも相当に問題発言をしていることが明らかであり、文化と軍国主義とを結び付けていると解釈されたのである。しかし、マンには、フランスの慣習による急進的な人道主義の方向に反対の立場があり、文学的な文明がドイツに広めようとしているデモクラシーをそのまま認めるわけにはいかなかった。文学的な文明を広めようとしている少数派の中に、ヴィルヘルム・ヘルツォークがおり、『考察』の中では名前を挙げられずに「あるドイツの文学者」として登場する。ヘルツォークは雑誌『フォールム』において、当時のドイツの知識人を批判した。それをロランが読んで、称賛の言葉を『戦いを超えて』に載せている。マンはそれを読んで、ロランが激しすぎる表現で自分を攻撃しつつも、攻撃の相手を認めていることに気がつい

ていた。マンは、「理性、啓発、緩和、道徳、懐疑、解消という意味での精神」である「文明」の存在意義を無視してはいない。ただ、自分とは無関係な、一元論者のオストワルトや、ダーヴィニズムを認めたヘッケルといっしょくたに扱われていることに困惑している。

ここで思い出されるのが、「弟は兄（ロランも含めて）の攻撃を防ぐことが、同時に自分自身の一部を攻撃することになるという苦境に立つ。」という佐藤晃一の指摘であり、またパウル・アーマン（Paul Amann, 1844-1958）の先に引用した指摘である。アーマンは、ウィーンの実業学校（Realschule）の教授で、ロマニスト（ロマンス語文学の研究者）であり、ゲルマニストでもあった。第一次大戦中はオーストリア軍の将校として出兵し、ガリシアの戦いで負傷している。ロマン・ロランに関して論文も発表しており、『考察』のロランに関する文章にかなり深い関係があることが指摘されている[40)]。

1916 年 2 月 25 日、マンはアーマン宛にかなり長い手紙を出している。アーマンが書いたロランに関する未公表の論文を読んだのである。マンはこの論文を高く評価し、ロマン・ロランとはどのような作家なのか、ある程度のイメージを得たようである。ロランの個性について戦争前ははっきりしたものを持っていなかったが、この戦争中特に『戦いを超えて』を読んで、「あまりにも宗教的であり、あまりにも人なつっこく、人道的」な人だと思ったことを告げている[41)]。ロランの考え方が理想主義的であり、「崇高な男性的な決意にささえられた情熱的な行為であり、実践するに至難な道である」が、「あまりにも美しすぎる」印象を与えることは、日本でよく読まれた『ジャン・クリストフ』などをめぐる文章にもしばしば書かれているが、これと一致する部分がある[42)]。また、ロランが大戦のような大変動に対して必要なことへの深い思慮を欠いているとも告げている。『考察』では、ロランが『戦いを超えて』において、フランスが戦争に対して政治的に責任がなく、精神的に高くとどまりながら防衛戦をしているように書いている点が納得できないとしている点と符合する。つまり、戦争中に平和主義を信奉することは不可能であると、アーマンに訴えているのである。戦争の初めにドイツ軍がベルギーのルーヴァンに砲撃を加えたことをマンは承認している。ロランは、このことや、フランスのランス大聖堂をドイツ軍が破壊したことを許しがたい暴力

行為と考えている。ここに戦争についての両者の受け取り方の決定的な相違が認められる。アーマンへの手紙はこのことを理解させる。

そして、もう一つ見逃せないことは、自分自身の兄が（書簡でははっきりと兄と書かれている）フランスの政治家とまったく同じような口ぶりで、ドイツを攻撃するのを聴かなければならなかったと言っていることである。『考察』では、次のような言い方になっている。

> 「私はもちろん分かっていた。ドイツの文明の文学者（der deutsche Zivilisationsliterat は兄のことである）が敵の『うそ理想主義』をまじめすぎるほどまじめに理解し、馬鹿なこと、忌わしいことでもかまわずにそれを自分のものとして受け取り、いっしょになって語り、みずからの国に向けたということを。しかし、なぜみずからの国だけに向けたのか、疑問だった。これは正義と言えただろうか。」[43)]

二人の一流の作家である、政治的な文学者（実は自分の兄）、現状を認識しない平和主義者（ロマン・ロラン）に立ち向かっていった非政治的人間の闘争はまさしく「正義と真理に反して」まだまだ続いていく。ロランへの反論のなかで、マンはスウェーデンの作家ペール・ハルストリョーム（1866-1960）が「戦時の随想」について批評してくれた文を紹介している。フランスとは異なり、中立の立場に立つ人である。「ロマン・ロランよ、私は何があなたの気にさわったかを知っているだけでなく、あなたの反対の本質を完全に評価することもできる」[44)] と述べてから、このスウェーデンのアカデミー会員が書いた「フリードリヒ大王とドイツの英雄主義」（1916）のドイツ語訳のことにふれ、その気持ちと精神はあなたとは異なっていたとした。ハルストリョームによれば、文明と文化の対立はマンにとってそれほど切実な問題ではない。もともとここで問題になっていることは、複雑な構造をもっているにしても、各部分がかかわりあっている一個の全体ではないか、ということである。彼は、この一個の全体を葉も花もある一本の木にたとえている。文化は木の花であり、文明は葉である。しかし、この木の生命と統一（Leben und Einheit）をなしているものを何と名づけるべきか、それは文明でもなければ文化でも

ない。両者を総合するジンテーゼであり、生そのものだ。マンはこの見解をゲルマン的であると思い、たいへん感激している。

この見解は、マンが文化と文明の対立をことさら強調しすぎたことへの批判となっていることに気づかされる。マンも鋭くとがりすぎた発言をしたのである。ハルストリョームが言っている意味での生そのものが問題になっているのに、マンは「機知に富みすぎていたし、二者択一的になりすぎていた。ドイツが問題になっているのに、フランス的であった。」実に矛盾した表現のようにみえる。自分のやり方のなかのフランス的な要素が、かえってロランを怒らせたのではないか、とマンは推測した。ロランその人は、生粋のフランス人であるのに、ゲルマン的であって、二者択一的な考えに反感を持つ。

一方、マンの中にフランス的な要素があり、「ラテン的なソフィスト」であるので、対立的な命題に惹かれるのだと、マンは自己分析をした[45)]。この興味深い »lateinischer Sophist« という一語には、注釈者の解釈がある。一般的にはたいへんゲルマン的と思われているマンの中に、非ゲルマン的なものがあり、それが lateinisch の意味である。Sophist のほうは、細かいことにこだわる知恵者、雄弁家、文学者であって、「マンはまたしても、自分の中に文明の文士の要素があることを否定していない」と述べているのである[46)]。

## おわりに

第一次大戦が終わって、1922 年にこの『非政治的人間の考察』が最初の全集に収録されるにあたり、作者は兄ハインリヒとロマン・ロランへの反論の部分を中心にかなりの頁を削除した。兄弟の和解が成立したためと、ロランに対する言葉使いなどが過剰であると判断されたためである。これが 1922 年の「削除版」とよばれる版である。その版も手元に置いているが、1955 年にトーマス・マンが死去した後に、1956 年長女のエーリカ・マンの編集により序文をつけて、ストックホルム全集版の一巻が初版として復元された。それから 1960 年のフィッシャー書店による 12 巻本の全集からはこの初版本で読まれている。1974 年に補巻として第 13 巻が刊行されたとき、長い間作者が全集版に収録してこなかった、大戦中の「戦時の随想」がようやく収めら

れたのである。より正確に言うならば、「戦時の随想」は 1968 年のペーパーバック・サイズの全集版（Das essayistische Werk 8 Bde）から、第二次大戦後の読者には購入可能となった。それは筆者の大学院生のときであったが、読んでみて同じトーマス・マンが書いたものとは理解しにくいエッセイであったといえる。ナチスと戦っていたマンからは想像しがたいほどに、Chauvinismus（国粋主義）が出ていたからである。

第一次大戦勃発からあと 3 年で 100 年であるが、このたびの斎藤和夫教授のご退職記念号に書かせていただく機会を得たので、第一次大戦中にかわされた、マン兄弟の確執、マン対ロマン・ロランの対決を『非政治的人間の考察』のなかの 1 章において再読することができた。100 年後の今日も色あせない人文科学的な大きな問題が含まれていることに感銘を受けたのである。しかし、「正義と真理に反して」の章はまだあと半分にあたる 40 頁を残している。1894 年に始まる「ドレーフュス事件」についての見解についての相違などが、綿々と続いていく。読む者にとってそこに何か痛ましいものが感じられる。

ロマン・ロランの大作『ジャン・クリストフ』は、高校生の時の愛読書であった。1912 年に完成した最後の章「新しい日」の第 4 部で、ロランはヨーロッパの戦乱を予感していた。「ヨーロッパは、武装している広大な夜警の観を呈していた。」（片山敏彦訳）と書いている。そしてクリストフの精神状態を 1813 年のゲーテの立場と同じだといっている。ナポレオンに対して、立ちあがったドイツ人を理解せず、戦争に向かわなかったゲーテ、そのゲーテの心情をクリストフにかぶせている。ライン河のほとりに生れたクリストフは、ドイツとフランス両国の文明が合流する地点にあって、二つの文明の「結合協力の必要を本能的に信じていた。」この精神は、兄ハインリヒの考えとも共通している。トーマスも論争を続けながら、次第に理解を深めたのではないかと想像するのである。

1） Gert Heine / Paul Schommer: Thomas Mann Chronik, Frankfurt am Main 2004, S. 243-244. 1875 年 6 月 6 日の誕生から 1955 年 8 月 12 日の死去まで、80 年にわたる生涯の記録。

2） Thomas Mann: Deutsche Hörer! Deutschland aus den Jahren 1940 bis 1945, Frankfurt am Main 1995.

3） Heinrich Mann: Zola. In: Macht und Mensch （Fischer Taschenbuch Nr. 5993, Studienausgabe）Frankfurt 1989, S. 112. ハインリヒ・マンが 1919 年に刊行した最初のエッセイ集であり、ドイツ共和国に献呈された。小栗浩訳では、Drauf-und Durchgänger という訳しにくい語をこのように訳している（ハインリヒ・マン『歴史と文学』晶文社、1971、209 頁）。

4） 本稿ではテキストとして、2009 年秋にフィッシャー書店から出版された注釈付の大全集 Große Kommentierte Frankfurter Ausgabe, Band 13-1 Betrachtungen eines Unpolitischen と 13-2 Kommentar-Band を使用した。Text-Band に添えられた Zur Textgestalt によると、1918 年に初版本がベルリンから出版された後、1922 年に「削除版」が出て、著者が過激な表現を削除したこと、この版は初版本によっていることが明記されている。著者は、兄ハインリヒや、ロマンに対する反論の多くを削除した。Kommentar-Band は、ヘルマン・クルツケによる解説と注釈を 684 頁にわたって収録しており、マンが引用した出典などについても詳しい。注釈者が利用した、研究書も数多く挙げられている。以下、Text-Band は Betrachtungen と略し、Kommentar-Band は Kommentar と略す。

5） Romain Rolland: AU-DESSUS DE LA MÊLÉE（1915）の翻訳。標題の訳語『戦いを超えて』は、みすず書房『ロマン・ロラン全集』第 18 巻（1959）に収録されている、宮本正清訳によっている。片山敏彦は、標題を「擾乱を立ち超えて」と訳し、新村猛は「乱闘を超えて」と訳した。新村猛『ロマン・ロラン』岩波新書、1959、66 頁。

6） 新庄嘉章訳。世界の文学第 29 巻『ロマン・ロラン―魅せられたる魂（Ⅰ）』中央公論社、月報（1963 年 6 月）所載。

7） 2 番目の章「プロ・アリス」では、戦争をやめさせるために何一つしないドイツの知識人たちに対する叱責のことばが、8 番目の章「偶像」においては、自分たちの文化が、支配本能に奉仕しているということに対する独仏知識人たちの無関心が問題となっている。

8）9） 原語は Sänftigung Sittigung。ロマン・ロランもドイツ語を引用している。

10） Kommentar S. 10.

11） ゾラ・エッセイは、ハインリヒ・マンの 60 歳の誕生日を記念して、ベルリンのキーペンホイヤー書店から出版されたフランス作家論『精神と行為』にも収録された。原題は Geist und Tat, Franzosen 1780-1930。ラクロ、スタンダール、

ユゴー、フローベール、ゾラなど18世紀から19世紀にかけてのフランス作家論。

12） Kommentar S. 13.

13） Heinrich Mann: Zola, S. 114.

14） Hermann Kesten: Heinrich und Thomas Mann. In: DER MONAT Jahrgang 11, Heft 125, 1959, S. 59-69.

15） Betrachtungen S. 167.

16） Betrachtungen S. 164.

17） Max Scheler: Über die Nationalideen der großen Nation. In: Krieg und Aufbau, Leipzig 1916.

18）19） Betrachtungen S. 165.

20） Betrachtungen S. 166.

21） 最近翻訳されたライバック『ヒトラーの秘密図書館』（赤根洋子訳、文藝春秋、2010）のなかで、ポール・ド・ラガルドの『ドイツ論』が、「総統の座右の書」として挙げられている（原題：Timothy W. Ryback: Hitler's private library, 2008）。ラガルドについて、『近代ドイツ政治思想研究』（慶應通信、1963）の著者である多田真鋤は、ナチズムへの影響を認めながらも、「その人種観において彼はナチスの人種理論の先駆者の一員ではなかった」と述べ、ナチス道徳の系譜学にラガルドを位置づけるのを躊躇している（第二部第三章　ポール・ド・ラガルドの政治思想）。

22） Betrachtungen S. 166-167.

23） Betrachtungen S. 177. マン兄弟の母は、ポルトガル系のブラジル婦人を母に、コーヒー園を経営していたドイツ人ブルーンスを父にもち、ブラジルで生まれた。自分には四分の一ラテン民族の血が入っていると、トーマスは自伝で述べている。

24） Betrachtungen S. 178. その部分は、長い疑問文で次のように表現されている。

Irre ich mich, wenn ich zu wissen glaube, daß es weniger die patriotistische Tendenz dieser Artikel, als ihre westlich-literarirische Form war, was unserem Literatentum böses Blut machte ?

われわれの文学者気質を怒らせたのはまさに、この記事（「戦時の随想」）の愛国主義的な傾向というよりはむしろその西欧的な文学的形式だったと、私が知るならば私はまちがっているだろうか？

25） Heinrich Mann: Zola, S. 112.

26） Thomas Mann an Philipp Witkop, Bad Tölz 発、1915 年 1 月 19 日の手紙。In: Dichter über ihre Dichtungen, Thomas Mann (I) Herausgegeben von Hans Wysling, 1975, S. 595.

27） 佐藤晃一『トオマス・マン』世界評論社、1949、187 頁。

28） Kommentar S. 285. 日本語版のロラン年譜を参照すると、「1892 年の 10 月クロチルド・ド・ブレアルと結婚。その父ミシェル・ブレアルはコレジュ・ド・フランスの古典文献学教授」となっている（世界文学全集 36『ジャン・クリストフ』Ⅲ、河出書房新社、1960）。数学者とは書かれていない。

29） Pro aris とは、ローマの文人キケロの次の句からきている。Pro aris et focis certamen われらの祭壇と竈とのための戦い。キケロ「神々の本性について」第三巻注釈、宮本正清（『ロマン・ロラン全集』第 18 巻「社会評論集」）13 頁。

30） 篠沢秀夫『フランス文学案内』朝日出版社、1980、106 頁。

31） 佐々木斐夫「ロランの政治思想」（『ロマン・ロラン全集』第 18 巻「社会評論集」解説）みすず書房、1959、667 頁。

32） 『戦いを超えて』50-51 頁。

33） Betrachtungen S. 182. ここには、「偶像」の章の一部であるかのような書かれ方をしているが、これは著者の勘違いであり、「プロ・アリス」の注の表現である。

34） 三省堂『クラウン仏和辞典』第二版による。

35） 『戦いを超えて』61-62 頁。

36） シラー『メッシーナの花嫁』第一幕第八場、相良守峯訳、岩波文庫、1950。

37） Betrachtungen S. 183.

38） Gedanken im Kriege S. 27-28, In: Thomas Mann Essays II 1914-1926, Frankfurt am Main 2002（Große kommentierte Frankfurter Ausgabe）.

39） Gedanken im Kriege S. 29.

40） トーマス・マン『非政治的人間の考察』（上）前田敬作・山口知三訳、筑摩書房、1968、246 頁。

41） Dichter über ihre Dichtungen, Band 14-I, Thomas Mann Teil I: 1889-1917, Hersg. von Hans Wysling, München 1975 S. 633-635.

42） 菅野昭正「ロマン・ロランの理想主義」（片山敏彦訳、世界文学全集 35『ジャン・クリストフ』Ⅱ、河出書房新社、月報、1961）高校を卒業して、浪人中に読んだ『ジャン・クリストフ』を引っ張り出してきたが、訳者でロランと親交があった片山敏彦氏が、その年 63 歳の若さで逝去されたことを思い出し、あれから 50 年の感を深くした。この小説はいま読まれているのだろうか。

43） Betrachtungen S. 205.
44） Betrachtungen S. 188-189.
45） Betrachtungen S. 190.
46） Kommentar S. 295.